

## 第 4 部

### 國際知識

## 第4部 国際知識

### 第1章 国際文化授業

#### 第1節 高校2年（SGC3期生）

##### 《概要》

高校2年次での「国際文化」授業のねらいには、大きく2つのポイントがある。一つ目は、7月に行われるタイ・フィールドワークの事前指導としての事前学習であり、二つ目は、帰国後、事後学習として生徒一人ひとりが取り組む課題研究論文の作成指導である。SGH指定校である本校の特色の一つが、スーパーグローバルクラス生徒を対象とした高校2年次での2週間のタイ訪問と、高校3年次での6週間のロンドン研修であるが、その「異文化体験」の第一弾である「タイ・フィールドワーク」を実りあるものとするための授業がこの「国際文化」という授業である。

事前学習の一環として、今年度は、恵泉女学園大学の高橋清貴先生の協力を得て、同大学で行っているタイ・フィールドスタディに参加した学生（5名）に来校してもらい、タイでどのような研究テーマを立て調査したか、発表していただいた。本校生徒もタイでの調査研究に対する具体的なイメージ構築ができたようである。また、タイの現状を理解させるために、例年本校の生徒がタイ・フィールドワークを実施するにあたって現地でお世話になっている恵泉女学園大学の押山正紀先生から、タイ語の基本や挨拶の仕方、カレン族の村でのホームステイに関する諸注意などを教わった。さらに、バンコクのスラム街の状況を知るために、スラム街に実際に住み、そこでハンディクラフトのブランドを立ち上げた日本人デザイナーの FUJI TATE PE 氏を招聘し、親しく講演を賜った。またそれと並行して、生徒達には現地で行うフィールドワークの仕方（調査方法・リサーチクエスチョンの設定・研究テーマの立て方等）を『課題研究メソッド』（岡本尚也著 啓文館）や『課題研究ノート』（同）を参考にしながら学ばせ、「研究計画書」を立てさせた。

##### 《実施一覧》

実施日	内容	場所	備考
4月27日（金）	高大連携（恵泉女学園大学）	本校	
5月18日（金）	GLOBAL VILLAGE FOR STUDENTS (以下 GVS)	本校	
5月26日（土）	高大連携（恵泉女学園大学）	恵泉女学園大学 多摩キャンパス	4期生合同
6月1日（金）	講演会「タイについて知ろう」	本校	
6月8日（金）	講演会「タイのスラム街から」	本校	
10月5日（金）	講演会「女性の美しさ～女性活躍時代 にしなやかに凛として生きるために」	本校	4期生合同・ 保護者見学
10月12日（金）	GVS	本校	
11月30日（金）	GVS	本校	4期生合同
3月15日（金）	GVS	本校	

講 師	《第1回》 恵泉女学園大学 人間社会学部 国際社会学科教授 高橋清貴先生 恵泉女学園大学学生 5名 《第2回》 恵泉女学園大学 人間社会学部 国際社会学科教授 高橋清貴先生 押山正紀先生 恵泉女学園大学学生 7名（卒業生1名）
プログラムタイトル	《第1回》 恵泉女学園大学「タイ・フィールドスタディ報告」 《第2回》 恵泉女学園大学スプリングフェスティバル（学園祭）見学
講義内容	《第1回》 アイスブレイク（バースデーライン） PPTを使った学生（5名）による「長期タイ・フィールドスタディ」報告 《第2回》 恵泉女学園大学多摩キャンパスの学生食堂で昼食 SGC3期生：高橋先生によるガイダンス →体験学習 FS（タイフィールド スタディー）展示発表見学 →大学生とのトークセッション SGC4期生：押山先生によるガイダンス →大学生とのトークセッション →体験学習 FS（タイ・フィールドスタディ）展示発表見学 全体で集合写真

### 《生徒感想》

- ・大学生の研究テーマがとてもたくさんあり参考になりました。
- ・PPTを利用しわかりやすい写真や体験のプレゼンを見て、改めて自分もタイに行くことが実感できた。
- ・（大学生は）5か月という長期滞在に比べ私たちは2週間と短いので、その中で何ができるか、十分研究を詰めていかなければならないと思いました。
- ・フィールドワークでの調査ポイントをどこに置くか参考になりました。
- ・実際にタイに行かれた大学生と1対1でお話ができる貴重な体験をさせて頂けて良かった。



大学で学生の発表を見学する



全員で集合写真

### 《生徒アンケート》

1. 講演・授業について（大変勉強になった 80% 勉強になった 20%）
2. 講演・授業の難易度（ちょうどよかった 80% 少し難しかった 20%）

### 3. 自分の意識が変わった（大きく変わった 50% 少し変わった 50%）

#### 《成果・課題》

本校のタイ・フィールドワークの実施に当たっては、恵泉女学園大学で長く行われていたタイ・フィールドスタディのノウハウを参考にさせていただいている。大学では数ヶ月の長期プログラムであるが、本校では二週間（北タイでのプログラムは実質一週間）という短期間で、その成果も限定的とならざるを得ないが、学生との交流を通して、生徒にとってはより身近な情報交換の場となり、今後の研究を進めていく上で、大いに参考になる行事であった。

#### 講演会「タイについて知ろう」

##### ● 講義内容：

- ①タイと日本の関係史（明治時代以降）
- ②タイ語の基本（挨拶の仕方・基本的なマナー・タイの歌）を学ぶ
- ③北タイ（チェンマイ・チェンライ）の歴史・地理について知る
- ④カレン族（ヒンラートナイ村）の暮らし・生活習慣を知る
- ⑤タイ・フィールドワークでの生徒各自の研究テーマの検証

講 師	押山正紀氏（恵泉女学園大学教授） ＊本校のタイ・フィールドワークの実施にあたり、北タイ（チェンマイ・チェンライ）でのプログラムのコンダクターを務め、現地での通訳をお願いしている。
講演タイトル	「タイについて知ろう」
講義内容	①タイと日本の関係史 1868年（日本の明治維新）、タイではチャラロンコン大王が即位し、近代化を進め、日本と発展がよく似ている。 ②タイ語の基本（チェンマイ大学語学センターで事前学習する） 「サワディカ」（こんにちは）・「コーポクンカ」（ありがとう）・「コートカ」（ごめんなさい）は最低使えるように。 ③北タイの歴史・地理 13世紀にチェンライ（「新しい都市」の意）に王都を中心に発展 ④ヒンラートナイ村（カレン族）について 人口107人 19世帯、精霊信仰（タイ政府は仏教徒として登録）、循環型焼畑で自給自足（1808ha 東京ドーム386個分 新宿区と同じ面積） ⑤フィールドワークで大切なこと 現地での新しい出会いを大切にする。決めつけない。何故そうなのかという疑問を大切に。答えは一つではない。過去と現在の比較。研究対象は誰・何？事前に調べておく。

## 《生徒感想》

- ・タイの概要だけでなく文化や生活などについて詳しく知ることができました。特にカレン族が行っている循環型農業についてのお話がとても印象に残っています。
- ・タイで訪問する NGO のことや高校生の家にホームステイするときの注意事項、そしてタイ語の歌を教えてもらいとてもためになりました。日本で調べられることをしっかり事前に学習し、タイに行って積極的に質問したいと思いました。
- ・フィールドワークで具体的な手段や方法を学べてよかったです。私の研究テーマに関して今回のタイでは関連施設に行かないことが分かり、テーマを変更することになったが早い段階で気づくことができてよかったです。
- ・言語の壁はあるが英語で積極的にコミュニケーションをとることが人間関係を築くために必要不可欠なことが分かった。

## 《生徒アンケート》

1. 今回の講演について（大変勉強になった 88% 勉強になった 12%）
2. 講演の難易度（ちょうどよかったです 100%）
3. 今回の講演で自分の意識が変わったか  
(大きく変わった 63% 少し変わった 25% あまり変わっていない 12%)

## 《成 果》

今回の講義では、7月に生徒たちが訪れるタイについて、事前指導の一環として、生徒たちが訪問前に知っておくべきことを中心にお話を頂いた。タイの歴史に始まり、タイ語の基本（挨拶）、北タイの地理（気候）、生徒達がホームステイするカレン族の村でのマナーなど、多岐にわたり大変わかりやすく講義していただいた。その後、生徒たちがタイでフィールドワークを行うにあたり、どのようなテーマで研究をしたいかを生徒一人ひとりが発表し、それに対し押山先生から具体的な示唆・アドバイスを頂いた。また生徒からの疑問・質問にも一つ一つ丁寧に答えて頂き、生徒達にとって研究へのイメージ形成がかなりできたようだ。特に「決めつけない、何故そうなのか？」という姿勢は今後の研究においてのバックボーンとなった。

### 講演会「タイのスラム街から」

#### ● 目 的：

- ①タイ・バンコク市街にあるクロントウイ（Klong Toue）スラムの実態を知る
- ②ストリートチルドレンの実態と解決策
- ③生徒の一人ひとりの研究テーマに対してアドバイスを頂く

講師	藤田哲平氏 (タイ・クロントイスラムで新しいブランド FEE MUE を立ち上げたクリエイティブディレクター)、公益社団法人シャンティ国際財団のボランティア事業クラフトエイドにも参加。
講演タイトル	「タイのスラム街から」

講義内容	<p>クリエイトディレクターとして、ファッションの世界で生きているが、FEE MUEはファッションだけでなく、スラム街のイメージアップを図るために立ち上げた。「スラム」と聞くと、環境が悪い、危険、麻薬、低所得、人身売買など、マイナスのイメージをもたれることが多いが、実は、バンコクのスラム街では、普段人と触れ合うことが出来ない都会と違って、昔の東京のような「人情味」「情緒」にあふれる雰囲気がある。</p> <p>スラム街でも明るい人々も多く、花が生けてあったりするところもある。逆に汚いところは想像を絶する汚さ・環境。犬や猫は自然発的に繁殖するため、時々タイ（バンコク）の保健省の役人が回って殺処分している。また教育環境については、「笑顔の国」というイメージの国にもかかわらず、階級社会である。スラム出身とわかると学校や職場で差別を受ける。そんなスラム街で子どもたちの教育の権利を確立したのが、プラティープ財團を設立したドゥアン・プラティープさん。1日1バーツ学校を始めた。スラム街に限定されているわけではないが、「人身売買」も盛ん。西洋人がアジアの子どもを買っている。ジェンダーについて、日本とタイの意識の違いをよく理解すること。タイを訪問するに当たって、自分の価値観をゼロにしてほしい。例えば皆さんに行くカレン族は独身女性と既婚女性では衣装も違う。男女の役割も歴然とある。また、宗教については仏教国だが、王室に対する尊崇は宗教以上の影響力がタイにある。</p> <p style="text-align: right;">(講義後半は、生徒の研究テーマについての質疑応答が行われた)</p>
------	--

### 《生徒感想》

- ・お話を聞いてスラムへのイメージが変わりました。しかし実際にスラムに住んでいる人たちが広く社会に出た時にスラム出身というだけでいじめられたり仕事に就くことが出来なかつたり様々な差別を受けていることもわかりました。
- ・「先入観なしで物事を見てほしい」という言葉が重く残りました。また何かを判断する時のために「教育」が必要ということもわかりました。

### 《生徒アンケート》

1. 今回の講演について（大変勉強になった 80% 勉強になった 20%）
2. 講演の難易度（ちょうどよかったです 80% 少し難しかった 20%）
3. 今回の講演で自分の意識が変わったか（大きく変わった 80% 少し変わった 20%）

### 《成 果》

講演をいただいたこの時期、生徒たちはタイのフィールドワークに向けて、各自でテーマを設定する時期にあたり、様々な文献やインターネットの情報を閲覧しながら、テーマを絞りつつあった。そのような時に、実際にタイのスラム街でそこに住む人々と生活を共にし、彼らの日常生活で散見される美的センスに着眼して、それをデザイナーとして取り入れ、装飾品やアクセサリーに生かしながら、デザインのフェアトレードを実際に行っている藤田氏の「生」のお話を聞き、生徒がタイに行ってからの具体的な興味関心がイメージとして形になったのではないだろうか。「ストリートチルドレン」「フェアトレード」「支援の在り方」など、いくつかのキーワードをもとに、生徒各自の方向性を示す道標となる講演だった。

## 講演会「女性の美しさ～女性活躍時代にしなやかに凛として生きるために」

### ● 講演内容：

- ①高校生の皆さん・保護者の方へ
- ②今、女性活躍時代を迎えてます。次の数値は何を意味しているのか？
- ③このままでいいの？ 少子高齢化が進む日本社会
- ④「生涯就業力」を磨くこと。それがこれからの女性の生き方の基本

講 師	<p>大日向雅美氏（恵泉女学園大学学長）</p> <p>*専門は発達心理学。お茶の水女子大大学院修士課程終了。学術博士。1970年初めのコインロッカーベビー事件を契機に、以来40年余り母親の育児ストレスや育児不安を研究し、地域で子育て・家族支援のNPO活動にも取り組んでいる。</p>
講演タイトル	「女性の美しさ～女性活躍時代にしなやかに凛として生きるために」
講義内容	<p>①高校生の皆さん・保護者の方へ これからどんな人生を歩んでみたいですか? お嬢様にどんな人生を生きてほしいと思っておられますか?</p> <p>②今、女性活躍時代を迎えてます。次の数値は何を意味しているのか？</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>1) 202030 : 2020年までに社会のあらゆる分野において、指導的地位に女性が占める割合を30%程度にする目標（内閣府・男女共同参画推進委員会）</li> <li>2) 111/144 : ジェンダーギャップの日本の順位（世界経済フォーラム）</li> <li>3) 83.2% VS 5.14% : 世界と日本の育児休業取得率</li> <li>5) 46.9% : 日本の育児による退職率</li> <li>6) 3人に1人(57%) : 日本の相対貧困率</li> </ul> <p>③このままでいいの？ 少子高齢化が進む日本社会 日本女性の活躍を阻んでいる本当の壁の正体は</p> <p>④「生涯就業力」を磨くこと。それがこれからの女性の生き方の基本</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>1) 生涯、自分らしい目標をもつ</li> <li>2) 共生の哲学をもつ</li> </ul>

### 《生徒感想》

- ・大日向先生が紹介してくださった「HKT48の歌」の歌詞を知り、現在の女性進出を阻んでいる原因が女性自身の考え方にあることに衝撃を受けました。
- ・ディズニープリンセスの性格が時代とともに変化しているという分析は、各時代の女性像を知る上でとても興味深いものでした。
- ・母子家庭の私の家では母が仕事をするのは普通なことと思っていたが、お話を聞いて、改めて母はすごいんだな、と感じました。
- ・自信をもって自分の考えを言えるよう、これからはたくさんの本や新聞を読み自分の意見を知識（人の生き死にに関わっている知識）に基づいたものにしていきたいです。

## 《生徒アンケート》

1. 今回の講演について（大変勉強になった 70% 勉強になった 30%）
2. 講演の難易度（ちょうどよかったです 100%）
3. 今回の講演で自分の意識が変わったか  
(大きく変わった 30% 少し変わった 50% あまり変わっていない 20%)

## 《成 果》

今回の講演は、本校の高大連携でお世話になっている恵泉女学園大学の学長先生直々に来校していただき、SG クラス合同（高校 1 年生～3 年生）で聴講するだけでなく、広く全校教員・生徒・保護者にも呼びかけた。当日は 50 名を超える聴講者が集まり、本校大会議室がいっぱいになる規模での講演となった。内容は生徒向けであったが、様々なデータや映像をもとに、現在の日本における女性進出の現状が手に取るようにわかりやすく説明され、生徒のアンケート結果からも分かるように、満足のいくものとなった。また、講演後の質疑応答でも、生徒達は積極的に質問し、大日向先生から多くの知識を得ようという姿勢がみられた。子育ての専門家でもある大日向先生の講演ということもあり、保護者の参加も見られた。

## GLOBAL VILLAGE FOR STUDENTS (以下 GVS)

目的	GVS とは、株式会社 LbE-JAPAN (GLOBAL EDUCATION COMPAY) が企画し提供しているプログラムで、本校では一昨年度より実践的な異文化コミュニケーションの場として実施している。本企画の基本的な形は、4 名の大学院留学生（国籍は様々）に来校していただき、そのうち 1 名がファシリティナーとして全体を統括し、残り 3 名がグループリーダーとして生徒たちと英語でグループディスカッションをするという活動である。ディスカッションの後はそれぞれのグループで交わされた意見を他のグループの生徒たちにも知つもらうために発表するシェアリング、そして最後はグループごとで振り返り（リフレクション）を行う。もちろん最初から最後まで基本言語は英語である。
プログラム タイトル	第 1 回 「タイ・フィールドワークの研究テーマの検証」 第 2 回 「タイ・フィールドワークのプレゼンテーション（4 グループ）」 第 3 回 「東京オリンピック（2020 年）までに、私たちが解決しなくてはならない問題は？」 第 4 回 「タイ・フィールドワークのポスターセッション」

内 容	<p>《第 1 回》 アイスブレイク・研究テーマ発表・発表に対して留学生との質疑応答・リサーチシート整理・リサーチシートをもとにシェアリング・振り返り</p> <p>《第 2 回》 オリエンテーション・4 つのグループに分かれタイ・フィールドワークの報告・質疑応答・留学生リーダーから生徒へ・気づいたことをカードに記入</p> <p>《第 3 回》 オリエンテーション・生徒によるプレゼンテーション・留学生リーダーによる質問・意見交換・振り返り</p> <p>《第 4 回》 オリエンテーション・生徒によるプレゼンテーション・留学生リーダーによるフィードバック・質疑応答・振り返り</p>
-----	--

### 《成果と課題》

英語を使ったコミュニケーション力を高めるため、日本に留学中の学生（大学院生）を招いて、毎回テーマを決めて生徒たちに発表（プレゼン）させ、それに対して留学生が適宜質問をし、内容をさまざまな視点から（特に国際的な視野で）意見交換をしている。生の英語話者を相手にするため、はじめは臆していた生徒たちも回数が進むに連れて、徐々に積極的になり、生きた英語でコミュニケーションを試みている。グローバルヴィレッジ 3 つの約束「Don't be shy. Speak in English. Mistakes are Okay.」を意識しながら、生徒自身の語学力のレベルの確認ができ、また、大学院生という立場から留学生の専門性を生かした意見を聞けることは生徒にとって大変有意義な時間となっている。第 3 回は 3 期生と 4 期生合同のプログラムということもあり、2 年生（3 期生）先輩の姿を見て、1 年生（4 期生）が刺激を受けてそれまでの取り組み方をかえるきっかけにもなったようである。



留学生に i-Pad で説明する



留学生の質間に答える生徒



第 2 回 GVS のプログラムの様



第 3 回を終えて全員で集合写真

## 第2節 高校1年生（SGC4期生）

### （ア）国際文化授業の概要

本校 SGH プログラムの一つとして、2015年度よりスタートした学校設定科目。毎週金曜7・8限の本授業では、教員からの講義型授業は最小限度にとどめ、以下の形式による授業を展開している。

- 1) フィールドワークによる調べ学習とプレゼンテーション
- 2) 書籍・インターネット等を利用した調べ学習とプレゼンテーション
- 3) ペアワークやグループワークなど集団単位の主体的学習
- 4) 有識者・専門家による講演
- 5) 学外の組織、とりわけ NPO への訪問とヒアリング
- 6) 外国人留学生との英語での交流（「Global Village」）

### （イ）期待される成果と目標

本校の SGH 研究テーマ「フィールドワークを通じた多民族社会における平和的発展の研究」に基づき、SG クラスでは主体的な問題発見・問題解決能力を養う手段として、フィールドワークという調査手法を用いることを全員に課している。インターネットを通じて容易に情報検索ができる現代社会において、媒体を介さずに直接的に現場で情報収集し分析する能力を高めることが、本授業の主目的である。また、有識者による講演、NPO への聞き取りなどを通じて、固定観念や偏見にとらわれず異文化や社会現象を相対化して理解する視点を獲得し、他者との共生について考察する切り口を得ることも本授業の重要な目的である。

### （ウ）一年間の授業の流れ

下記の流れで指導を実施してきた。

	日 時	内 容 ①	内 容 ②	場 所
1 学 期				
1	4月20日(金)	「国際文化」オリエンテーション	SDGsについて・課題研究の概要	教室
2	4月27日(金)	メソッド①「課題研究を始めよう」	仮テーマの設定	マルチメディア室
3	5月11日(金)	仮テーマプレゼン		教室
4	5月18日(金)	講演Ⅰ 酒井教雄 学園顧問「日本人の生活文化」		大会議室
5	5月26日(土)	恵泉女学園大学スプリングフェスティバル訪問		恵泉女学園大学
6	6月1日(金)	仮テーマプレゼン	メソッド②「課題研究を行ううえで」	教室
7	6月2日(土) 6月8日(金)	JICA 地球ひろば(SGC3・4期生合同) キャンパスツアー(授業無し)		市ヶ谷
8	6月15日(金)	GVS(Global Village for Students )①		大会議室
9	6月22日(金)	メソッド③「課題・研究テーマを知る」	メソッド④「情報収集から研究テーマ発見へ」	教室
10	6月29日(金)	フィールドワーク準備学習		教室
	8月2日(木) 8月3日(金)	SGC4期生合宿		第二団参会館
2 学 期				
11	9月14日(金)		夏季課題発表・中間テーマ設定	教室
12	10月5日(金)	講演Ⅱ 大日向雅美先生(恵泉女学園大学学長) 「女性の美しさ—女性活躍時代にしなやかに凜として生きるために—」		大会議室

13	10月12日(金)	フィールドワーク・調査結果のまとめ2(ポスター発表準備)	教室
14	10月19日(金)	フィールドワーク・調査結果のまとめ2(ポスター発表準備)	教室
15	10月26日(金)	GVS②予定	大会議室
16	11月2日(金)	フィールドワーク・調査結果のまとめ3(ポスター発表準備)	教室
17	11月9日(金)	課題研究発表(ポスター発表) 滝田祥子先生(横浜市立大学)講評	大会議室
18	11月16日(金)	高2課題研究発表に参加	大会議室
19	11月30日(金)	GVS③予定(SGC3期生と合同)	大会議室
20	12月12日(水)	講演Ⅲ 大川真先生(中央大学) 「ヘイトスピーチを考え抜く」	大会議室
	12月18日(火) 12月19日(水) 12月20日(木)	3期生・4期生合同合宿(アジア学院)	栃木県

### 3学期

21	1月11日(金)	GPS-Academic(80分)(SGC4期生合同) Global Proficiency Skills-program Academic	教室
22	1月18日(金)	先行研究調査①	図書館
23	1月25日(金)	先行研究調査②	図書館
24	2月8日(金)	先行研究プレゼン準備①	教室
25	2月15日(金)	先行研究プレゼン準備②	教室
26	2月22日(金)	研究テーマ発表(プレゼンテーション)	教室
27	3月15日(金)	GVS④	大会議室

## (エ) 授業の内容

### 1、課題研究テーマの設定

今年度は各自の研究テーマを設定するにあたり、世界の諸問題への取り組みとしてのSDGsを紹介した。1学期にはSDGsの課題から一つを選ばせ、新聞記事でその分野に関わるものを探し、クラス内で共有させるという方法をとった。また、市ヶ谷にあるJICA地球ひろばでは、中高生にとって非常にわかりやすい展示を通してSDGsについて学ぶことができるため、SGクラスの生徒を引率して学びを深めた。

夏休みの間に自分の興味を持った分野についてのフィールドワークを実験的に行い、2学期の授業を利用してポスターにまとめさせ、高1高2合同の発表会を学内で実施した。この際には、横浜市立大学の滝田祥子教授にも来ていただき、生徒たちの発表を聞いた後で講評を頂くことができた。講評の中では、アンケート調査を行う際のサンプリングに関する問題、参考資料・引用資料をインターネットだけに頼ってしまうことへの問題点などを指摘いただいた。

3学期に入り、各自が次年度のタイでのフィールドワークの研究テーマを設定する時期になってきたが、もう一度原点に返って正確に問題を把握するため、先行研究の整理を行わせた。図書館で授業を行い、各自が気になっているテーマに関して最低3冊の書籍を読み、その内容をまとめてプレゼンをさせた。これにより、書籍に資料を利用することの重要性と正確性を意識させようとした。

### 2、講演会

全部で3回の講演会を実施することができた。特に今年度初めて講演にいらっしゃったのは恵泉女子大学学長の大日向雅美先生と、中央大学准教授の大川真先生である。大日向先生は「女性の美しさ—女性活躍社会をしなやかに凜として生きるために—」との演題で、日本社会における女性の立ち

位置についてジェンダー的な視点から論じられた。また、大川先生は「ヘイトスピーチを考え抜く」という演題で、現代社会に根強く残る差別意識について論じられた。ともに生徒たちにとって多様な価値観、判断基準を得るために非常に効果的な講演だったと考える。

### 3、Global Village for Students(GVS)

2年前から実施している、株式会社 LbE japan が行う Global Village for Students を今年度も実施した。日本の大学に在籍する留学生がリーダーとなり、各国の紹介に始まり社会課題を話し合うところまですべて英語で行う活動。留学生たちも母語が英語というわけではなく、完璧な英語は求められないかわりに幾度となく「恥ずかしがらずに発言すること」を求められるため、英語をツールとして使用するトレーニングとして非常に有用だった。

### 第3節 高校1年（SGC4期生）合宿

#### 夏期合宿

- 日 時：2018年8月2日（木）～3日（金）
- 場 所：立正佼成会第二団参会館（杉並区方南）
- 生徒（人数）：1年A組（SGクラス）9名
- 引率教員：宮川・片桐・出射（全行程）・セーラ（2日夕方まで）  
・崎山（セーブザチルドレン訪問時）

研修目的	① タイフィールドワークの研究テーマを模索する ② 世界の動きを掴み、時事問題の背景をつかむ ③ 寝食を共にして相互理解を深める ④ 課題発見能力・課題解決能力の養成（タイ・フィールドワーク事前学習）
事前学習	7月26（木）合宿オリエンテーション（グローバルセンターにて） ・「しおり」配布・持ち物確認・行程の説明・課題の説明
報告事項	SGクラスが特進文理クラスと合同になり、普段の学校生活の中でなかなかSG生徒として単独で行事をこなす機会がないここ数年、1学期が終了した夏休みに行われる今回の合宿が、SGとして初めての宿泊行事となる。一泊二日という短い合宿だったが、それぞれのアクティビティを通して、SGCのメンバーとしてのアイデンティティが大いに芽生えたようである。 校外に出て（上野公園・駅周辺）のミニフィールドワークは事前に研究テーマ・仮説を決めて、暑さにも負けず、全員が積極的に外国からの観光客に英語で話しかけ、インタビュー調査をこなしていた。さらに、各種NPO・NGO訪問（「セーブザチルドレン」「APLA」）でも、全員が質問し、自ら学び、必ず何かを掴み取ろうとする姿勢が見られた。また、タイのフィールドワークを終えたばかりの3期生の先輩たち（4名）が合宿に駆けつけてくれ、ほやほやのタイの話してくれたが、それを聞き大変刺激を受けていた。 最後の振り返りでは、ほとんどの生徒がこの合宿で今までの自分を変えていくこうと、発言する姿が印象的だった。しかし初めての合宿と言うこともあり、基本的な集団生活、例えば五分前集合や返事・挨拶などの面で、教員側から確認しないと注意を怠りがちな状況が見られた。そういうところの意識付けを今後行い、次年度に行われるタイフィールドワークの行事につなげて行きたい。

## プログラム行程

	テーマ	行 程
8月2日 (木)	①ミニフィールドワーク実施 ②NGO訪問 ③クラス内の交流を深める	8:30 集合 8:40 開校式（8階研修室） 8:50 ミニフィールドワーク準備・プレゼンテーション 11:30 上野公園着、ミニフィールドワーク 12:40 昼食（上野・北タイ料理） 14:20 公益社団法人「セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン」 14:30 ワークショップ 18:00 ミニフィールドワークの発表・振り返り 19:20 夕食・入浴 20:50 SGEを通して交流 21:50 本日の振り返り・宮川部長のお話 23:00 点呼・就寝
		6:00 起床・洗面・朝食（大聖堂）
		9:00 3期生（4名）との交流会・タイフィールドワーク報告会
		11:40 昼食（高田馬場・ビルマ料理）
		13:00 特定非営利活動法人「APLA」事務局着
		13:15 事務局長吉澤真満子氏によるフェアトレードについての講義「バランゴン・バナナを通して」
		14:40 閉校式・合宿の振り返り・決意発表
		15:45 解散



「セーブ・ザ・チルドレン」でのワークショップ



上野公園でのミニフィールドワーク

## 《生徒アンケート》

【振り返りアンケート・自由記述覧】（今回の合宿で最も印象に残っていることは？）

- ・上野公園でのフィールドワークです。普段、外国人にインタビューをする機会があまりないのでとても良い経験になりました。やはりまだ発音や英語の知識が足りないと感じたので、暇な時でも単語などを覚えるようにしたいです。
- ・SGE の時間です。みんなとゲームを通じて交流でき、思ったことを共有できてよかったです。
- ・先輩から聞いたタイの話。先輩がこうした方がいい、あれを持っていった方がいいなど沢山のアドバイスをくださったので大変勉強になったし、安心にも繋がった。また今まで全くなかった自覚が少しだけ持てるようになり、とてもいい機会になったと思う。
- ・みんなの考えたことや質問、感想が聞ける機会、さらに自分の意見や感想をみんなの前で述べる機会がたくさんあったということです。初めて行ったフィールドワーク、上野で行ったインタビューはもちろん、施設訪問でも得られるものが本当に多かった体験で毎回新鮮でした。このような機会があったことによって、何事もじっくり考えて吸収して発信する大切さに気づきました。普段の授業では数人しか言わなかつた意見や感想なども、9人全員が自ら手を挙げて言えたこと、本当に嬉しかったです。
- ・SGE では、みんなが思っていることを赤裸々に話してくれてみんながどう思っているのか知ることができたとともに SG としての自覚を強く感じました。
- ・SG のみんなとの初めての合宿だったので、みんなの意外な一面などが知ることができました。より仲を深めることによって、これから 3 年間がより楽しみになりました。

## 《成 果》

SGC4 期生 9 名による初めての合宿である。入学して以来、青梅オリエンテーション合宿や学習合宿では、SG クラスのメンバーを意識することなく、1 年 A 組文理コースとして過ごしている彼らにとって、SG 生徒としての自覚や帰属意識を確認する大切な合宿となっている。

昨年の 3 期生（現高校 2 年 SG）の時もそうであったが、一泊二日という短い合宿にもかかわらず、それぞれのアクティビティを通して、SGC のメンバーとしてのアイデンティティが芽生えたようである。また、生徒達も積極的に合宿に参加し、1 日目の午前に行われた上野公園での英語を使ってのミニフィールドワークでは、35°C を超える猛暑の中で、たくさんの外国人観光客に対して、インタビュー調査を試みていた（1 時間という短い時間で各グループの平均インタビュー組数は 7.5 組、中には 10 組の外国人観光客にインタビューしたグループも）。終了後の発表でも、自ら立てた仮説をしっかりと論理的に分析しており、4 期生のレベルの高さがうかがえた。訪問先の NPO 組織でも、事前に宮川部長から言われた注意事項を意識して、全員が施設スタッフに質問することができていた。さらに、夜に行った SGE（構成的グループエンカウンター）では、初めて 9 人で行ったこともあり、普段ゆっくりと話したことのなかつた生徒同士、相互理解を深めることができたようだ。

タイのフィールドワークから帰ってきたばかりの 3 期生との交流会でも、積極的に先輩たちに質問し、次年度に向けた意識を高めることができた。

## SGC3 期生・4 期生合同 アジア学院 研修合宿

- 日時：平成 30 年 12 月 18 日（火）～20 日（木）
- 場所：アジア学院（栃木県那須塩原市）
- 生徒（人数）：3 期生（10 名）・4 期生（9 名）・タイ留学生（1 名）
- 引率教員：Sara 鈴木・片桐正雄

研修目的	<p>①課題発見能力/課題解決能力の養成。</p> <p>②共同生活を通して、SGC3 期生・4 期生の交流を深める。</p> <p>③アジア学院外国人スタッフとともに農作業（ファームワーク）を通じて、英語のコミュニケーション能力を高める。</p> <p>④次年度に行われるロンドン研修（3 期生）、タイ・フィールドワーク（4 期生）に向けての事前学習を含めた課題研究の仕方を学ぶ。</p>
事前学習	<p>12 月 12 日（水）15：30～16：00 於グローバルセンター</p> <p>・「しおり」配布　　・片桐より「持ち物」「行程」諸注意</p>
報告事項	<p>学校法人「アジア学院（アジア農村指導者養成専門学校）」において、SGC の冬季合宿を行った。SGC3 期生・4 期生合同での二泊三日の合宿である。3 期生は前年参加しているため 2 回目だが、4 期生は初めての参加となった。合宿の中で生徒たちは、様々な国籍（アメリカ合衆国・ドイツ・ネパール・インド・フィリピン・ベトナムなど）のアジア学院スタッフとともに、英語でコミュニケーションをとりながら、農業体験を通して、「育てる」（＝自然や命あるものを慈しむ）、「食べる」（＝他の命をもらって、自らの命をつなげる）、という行為について深く考え、更に、その命をもらって生きている自分自身をどう生かしていくのか（＝サーバントリーダー「奉仕的指導者」としての生き方）について学んだ。</p> <p>また、学年を超えてスーパー全球・クラスのメンバーとしての共通意識を持ち、交流を深めることができた。特に 3 期生は昨年と比較し積極的に外国人スタッフに対して話しかけている様子を見て、その成長振りが際立った。その先輩たちの姿勢に後輩の 4 期生の生徒たちも刺激を受けていた。集団行動も良好で、特に体調を崩す生徒もなく、みな熱心にプログラムに取り組んでおり、合宿の目的を概ね達成できただように思う。さらに、アジア学院スタッフの方々も大変生徒に対して好意的でよくしてくださいり、明るく元気に率先して動く本校の生徒たちを見て感心されていた。</p>

● プログラム行程

	行 程
12月18日 (火)	<p>11:30 東京駅「銀の鈴」集合・点呼 11:45 移動（精算窓口）→ ホームへ 12:12 東北新幹線（やまびこ209号）発・車中で昼食 13:21 那須塩原駅着（アジア学院山下さん出迎え） 13:30 マイクロバスで移動（荷物はトラックで） 13:45 那須セミナーハウス着→各部屋へ荷物搬入 14:10 閉校式（生徒代表3期生宍戸挨拶・山下さんより挨拶） オリエンテーション（ヴェロさんによる諸注意）・アイスブレイク 15:30 キャンパスツアー 16:00 フードライフ・ワーク（農作業） ①ニンジン収穫 → ②麦踏み・③家畜（豚・ヤギ・鶏）の世話 17:15 トークセッションI（@オイコスマチャペル） 「リーダーシップについて」アジア学院スタッフ：山下崇氏 18:30 夕食（@コイノニア）・（Aグループ後片付け） 生徒代表（4期生前田）英語で紹介スピーチ 19:30 トークセッションII（@コイノニア）3グループに分かれて ①ネパール人 ②インド人 ③フィリピン人 20:30 セミナーハウス着・入浴（各部屋ごと） 21:30 班長会議（ロビー）・各部屋貴重品回収 22:30 就寝</p>
12月19日 (水)	<p>6:00 起床 6:45 玄関ロビー集合 7:00 ラジオ体操 7:10 フードライフ・ワーク（①枯れ葉回収作業、②家畜餌やり・鶏卵収穫） 8:15 朝食（Bグループ後片付け） 9:30 朝の集い・生徒代表（3期生松本）英語でスピーチ 10:40 トークセッションIII（@講義室） 「サーバント・リーダーシップについて」アジア学院校長：荒川朋子氏 2人ずつペアになってシェアリング 12:30 昼食（Cグループ後片付け） 14:00 トークセッションIV（@講義室） 「夢について」アジア学院卒業生（インターン）：阿部眞希子氏 2人ずつペアになってシェアリング 15:40 フードライフ・ワーク（①家畜餌やり、②玉葱の収穫） 18:30 セミナーハウス出発（バス移動） 19:00 オーガニックレストラン「HIKARI SHOKUDO」着 夕食・ビーガン料理 食後にオーナーシェフ（臼井さん）のお話 21:00 レストラン出発 21:30 セミナーハウス着・班長会議（ロビー）・入浴 22:30 就寝</p>
12月20日 (木)	<p>6:00 起床 6:50 玄関ロビー集合 7:00 ラジオ体操 7:10 農作業（①家畜餌やり、②大豆選別作業） 8:15 朝食（Dグループ後片付け） 9:00 立教大学 SGH 課題研究発表会（12月23日実施予定）参加生徒打ち合わせ 9:30 朝の集い・Sara先生英語で挨拶 10:00 荷物整理（ロビーへ） 10:30 清掃（各部屋・セミナーハウス各部所） 11:00 ペアに分かれてシェアリング・振り返り（@地下ミーティングルーム） 12:30 昼食（Eグループ後片付け） 13:30 振り返り（続き）・閉校式 14:20 那須セミナーハウス出発（バス移動） 14:35 那須塩原駅着・お土産・トイレ休憩 14:50 再集合・ホーム移動 15:02 東北新幹線（やまびこ214号）発 16:16 東京駅着 16:35 新幹線改札口・解散</p>

農作業（麦踏み）



ネパール人スタッフの講義



農作業（家畜への餌やり）



### 《生徒感想》

今回の合宿で最も印象に残っているのは？

- ・ビーガンの人が経営するレストランです。合宿前は「ビーガン」という言葉すら知らなかつたですが、今回の合宿を通じて「ビーガン」や、「動物の大切さ」について、深く学ぶことができたので良かったです。
- ・外国の方に学ぶことのできる農業体験はとてもいい経験になり、自分がいつも頂いている食べ物について改めて向き合い感謝するきっかけにもなりました。合宿で聞いたお話は(サーバントリーダー・ビーガンなど)どれも心に残りましたが最も印象に残ったお話は、インドから来た方から聞いたお話です。その方が住んでいた地方では女の子は学校に行ってはいけないと言われていたそうで、そんな中彼女は第一に声を上げて行動を起こしたと聞き驚き感心したとともに、自分にはきっとできないだろうなと思ってしました。こんな恵まれた国で毎日三食食べられてしっかりと勉強できて感謝しかないと思いました。
- ・サーバントリーダーシップについてです。初めて聞く言葉でした。私はこれまでにリーダーシップというものをあまりとてこなかったので、とても勉強になりました。これからリーダーシップを取る機会があっても下から支えることは誰でもできることだと思うので、大変な仕事や人の嫌がる仕事などを率先してやろうと思いました。

- ・アジア学院にいる様々な国籍の方とお話しや交流をしたのがもっとも印象に残っています。みんな一人一人が自分の確立した意見や目標を持っていて自分もそのようになりたいなと思いました。アジア学院の方々が掲げていた「リーダーシップ」という目標を色々の形で持っているところにも強く感動しました。特にそれが感じられたのは朝の集いです。発表する人が前に立ってパソコンやスライドを用いながらみんなに伝えたいことを話している様子はさながらみんなをまとめるリーダーのようでした。また、農作業を通して命に触れることで食べられることのありがたみや命を育てることの大切さなどを知ることができました。そして、私がこのアジア学院合宿でもっとも感動したのは、机に置かれたお菓子の袋が固く開けられなくて困っているときに院生の方が複数人で開ける方法を試してくれたことです。そのときの院生の方々はみんな笑顔でとても優しい人なのだと思いました。なかなか日本でこのような場面を見たことがないので感動しました。
- ・私が今回の合宿で最も印象に残っているものは、人間が食べ物として使用しないと判断された動物がすぐに捨てられてしまうという話です。人間は動物の命を頂いて生活をしているということは分かっていても、私達の食卓にくることもなく捨てられてしまう、という話は、怖くて、今まで考えたことがありませんでした。今は私達人間にとて都合のいいような仕組みにするため自然や動物を利用しているけど、立場が違っていたことだって十分にあり得ると思います。それなのに、この状況を知らないどころか、食べ物を自分の好き嫌いに合わせて粗末にしていた自分の行動を反省しました。

## 《成 果》

今回の合宿では「サーバントリーダー（奉仕的指導者）とは」をメインテーマとして掲げ、合宿のプログラム内容が、SG生徒として「リーダーとは何か」を考える大いなるきっかけとなった。学校法人アジア学院はキリスト教団体が母体となっているものの、国籍、宗教、民族、価値観などの違いを認めながら「共に生きるために（共生）」を合言葉に、途上国の農村指導者養成に努めている学校である。その三本柱が「フードライフ・ワーク」（農作業を通して「命」を育み、「命」を頂く）、「サーバントリーダー」（奉仕者としての指導者）、「コミュニティー・オブ・ラーニング」（自分を地域でどう生かすか）である。昨年の合宿では「フードライフ・ワーク」をテーマに、他の命をもらって、命をつなげている自分と向き合ったが、今年は、そこから更に一歩進んで、その自分の存在をどう他に影響を与え生かしていくか、という根本的な生き方・あり方を学んだ。生徒たちは、おおむねよくプログラムに取り組み、積極的に活動した。特にアジア学院参加が二年目となる3期生は5分前集合をきちんと守り、自ら率先して役割を受け、元気に声を掛け合いながら喜んで参加していた。その積極的で前向きな姿勢が印象に残った。また、今回のプログラムではトークセッションが多く設定されていたが、話を聞くだけでなく、グループに分かれたり、ペアを組んだりしてシェアリングを多く行った。それらを通して、学年の枠を超えてグローバル・クラスの一員として共通意識を持って3期生・4期生ともに交流を深めることができた。

昨年に引き続き、今回の合宿も冬場での農作業体験となつたが、限られた条件の中で、アジア学院スタッフの方々が大変温かく私達一行を受け入れて下さったおかげで、生徒たちは、東京ではめったに体験できない貴重な経験させていただくことができた。短い期間ではあったが、合宿の目的も充分達成でき、次年度のタイ・フィールドワークやロンドン研修に向けての充実した合宿となつた。今後もこの形態でSG生徒の必修の行事として定着していくことが望まれる。

## SGC4 期生 エジプト・アラブ共和国大使館との異文化交流

- 日時：平成 30 年 8 月 29 日（水）
- 場所：エジプト・アラブ共和国大使館（東京都目黒区青葉台 1 丁目 5-4）
- 生徒（人数）：4 期生（9 名）
- 引率教員：秋田聰大、崎山隆則、橋本敬一

講 師	公益財団法人ニッポンドットコム モハメド・ハッサン アラビア語編集長
講演タイトル	「エジプトの文化・宗教・地理・歴史について」
事前学習	各自がエジプトに関する好きなテーマを選んでレポートをまとめる。
講義内容	①生徒代表 2 名が英語で「イスラム教」「エジプトと日本の関係」というテーマでプレゼンテーション。 ②アフマド・エルバダウイ書記官による挨拶。 ③公益財団法人ニッポンドットコムのモハメド・ハッサンさんがエジプトの文化・宗教・地理・歴史について学ぶ。
総括	エジプトの人々にとって日本は昭和のドラマ「おしん」のイメージやアニメの影響が強い。こうしたことから、もっと日本の実像を理解してもらいイメージのギャップを埋めるための交流が必要だと話があった。ピラミッドやイスラム教などといった固定的なイメージだけではなくエジプトの「いま」について多面的に理解することは直接交流が欠かせない。例えば、ラマダンに関するエルバダウイさんやハッサンさんの解説は、インターネットで少し調べて得られる情報とは異なる「生きたお話」であった。今回のエジプト大使館訪問は、このような新たな気づきを得られる大変貴重な機会となった。

### 《生徒感想》

- ・もともとエジプトの文明や歴史に興味だったので大使館の中まで入ってお話を聞かせていただき、すごく楽しかったです。違う国とはいえ、タイやイギリスへ行くためへの事前学習の大切さや質問するときの注意点に気づけたと思います。今後のフィールドワークにつなげていきたいと思います。
- ・国によって価値観というのは全然違うし、それがいい方向にも悪い方向にも進んでしまうということが分かりました。エジプトと日本が今後も良好な関係を築いていくためにも、互いの価値観を大切にすべきだと思いました。



## 第2章 国際文化総括

### 1. 高校2年生 (SGC3期生)

#### (成果と課題)

タイを訪問した2週間の生徒の積極的な調査態度には目を見張るものがあった。一つ上の学年(2期生)と比較し、どちらかというと消極的で引っ込み思案な生徒が多いと思われていた予測に反して、彼ら3期生は様々なNGO・NPO組織を訪れるなかで、時間が許す限り質問し、何かを得ようとする姿勢を大いに見せていた。ゆく先々で現地のスタッフの方々からその熱心な生徒の調査姿勢・態度は称賛された。とは言え、現地に訪れる前に設定した各テーマは、実際に現地に行ってその現状を知るにつけて、軌道修正を余儀なくされたり、またフィールドワークで収集したデータが少量のため(調査方法が稚拙であったり)データとしての価値を十分もてなかつたりして、その課題研究を思った通りに進めることが難しい状況が多く見られた。

帰国後の事後学習では、各自の研究テーマに沿った展開を図るべく、いきなり論文を書かせず、まずはポスターによるプレゼンテーションを行わせ、各自の課題研究の骨子を図示しながら展開させた。生徒同士(4期生も含め)でお互いに発表し、見学させ合い、質疑応答の時間をとるなどして、多くのアドバイスや示唆を得たようである(この発表会は校内の教員にも呼びかけ講評の協力を得た)。

また、一定の書式で「研究要綱」をつくらせ、論文の構成を考えさせた。今年度は、昨年の反省を踏まえて、国際理解科の教員(ネイティヴ教員を含め)同士で3期生全員の「研究要綱」に目を通してもらい、お互いに共通理解を得るとともに、各生徒に対する軌道修正をはかった。しかし、いざ論文作成に入ると、生徒の学力レベルにもよるが、内容が浅く、学術的に論文と言えるのか(ほとんどが個人的な感想文レベル)、教員側で期待するレベルまでには程遠い状況は否めなかった。「国際文化」の授業で多くの大学の先生方を招聘し、講演をいただいたが、多くの先生方が「ネットに頼らず書籍を読むこと」を力説されていた。生徒達にとってまさにその文献に触れる時間があまりに少なく、それがこのような論文を書く段階で如実に表れることを痛感した。

今後は、3年次の4月から5月にかけて行われるロンドン研修に向けて、タイで調査した研究論文を様々な視点から再検証し、英語で論文を完成させることとなる。生徒の英語力もさることながら、3期生の生徒達が持つ前向きな姿勢を期待してやまない。

### 2. 高校1年生 (SGC4期生)

#### (成果と課題)

4年目となる高校1年生の「国際文化」において、以下の点を改善して実施した。

- (1) 新聞記事や書籍を元に研究の土台となる知識の醸成を目指した。
- (2) タイフィールドワークのテーマ決めを急がず、先行研究を整理・発表させた。
- (3) 『課題研究メソッド』(啓林館)に即して、研究の進め方の手順をしっかりと確認した。

昨年度の高校1年生では、できるだけ早くタイフィールドワークのテーマ設定を行い、専門分野の研究を効率的に行おうと考えたが、今年度は反対にテーマ設定を意図的に遅らせようと考えて実施した。その目的は、性急なテーマ決めによってその理解が浅いものになってしまふこと、また、フィールドワークを経験した後に、あらかじめ考えていたものとは異なる分野に対する関心が深まってしまい、既に設定したテーマとどちらを追究するのかというジレンマに生徒が陥ってしまうことを防ぐためである。

とはいっても、何の目的も無く自発的に新聞記事や書籍を集めてくるのは難しいため、1学期の段階で「仮テーマ」という設定をさせ、いつでも自由に変更してよいことを強調した。

以上のようなことを年度当初に考えて実施したが、今年度の授業に参加していただいた2名の先生方からも、非常に示唆に富む話を聞くことができた。6月15日（金）には一般社団法人グローカルアカデミーの岡本尚也氏が来校され、授業の様子を視察していただき、最後に生徒たちにコメントを下さった。その後の教員との意見交換会でも、海外フィールドワークに行く目的はこれまでの自分の世界観を崩すことにあるので、事前に厳密な研究テーマを設定しておくのは難しいのではないか、それよりも、現地で感じたことを大切にして、フィールドワーク後に研究テーマを設定するほうが深い研究ができるのではないか、という本プログラムの構成に関わる非常に重要なお話しがあった。また、11月9日（金）には横浜市立大学都市社会文化研究科の滝田祥子教授に来校いただき、生徒たちのポスター発表をご覧いただいた。このときには、資料をインターネットサイトばかりにするのではなく、しっかりした書籍を読み、正確な情報を集めて研究することの重要性を指摘された。また、社会学の専門者の立場として、高校生としての量的調査の難しさと、もっとインタビュー等の質的調査を行うべきだという発言もあつた。

両者のお話は、本授業における当初計画とも軌を一にするものであるため、3年間を通じた今後の指導計画を考える際に大いに参考にしたい。

（第4部文責：片桐正雄、崎山隆則、出射見奈子）